

## 初修外国語中国語教育実践から学んだこと

教養教育センター 楊 世英

本文は、長く教養教育科目としての中国語教育に携わったものとして、中国語教育実践から得たこと、経験したこと、とくに教育現場で上手く行かなかったことや挫折したことをまとめたものである。敢えて言えばネイティブスピーカーからの感想も混じており、ご容赦ください。通常にいえば大学初修外国語、1年生あるいは2年生の選択外国語として教養教育科目を指している。これらの語学教育実践例をメインとする。教育理論や語学論から分析ではなく教育現場から一種な感想でもある。

初修中国語は主な教育内容として基本的に「発音」「会話」「文法」「作文」四段階に分けており、これらの順番で授業を行われるのが普通である。実際に教育実践した場合、教材ともあれ、教員が学生の学力を勘案して調整する時はよくあることである。つまり初修中国語は「基本会話ができる、基本的な文法を使用して簡単な文をつくる」を到達目標としているから、学生はシラバス通り、事前学習・事後復習を行う前提で授業を教員主導でしかも語学教材に従い授業が進む。さらに語学教材の不備や足りないところがあれば教員が自ら補足資料を利用することで教育目標を達成することを目指すのはごく一般的な教育過程である。

### 1. 発音入門とネイティブスピーカーの役割

まず、発音は初修外国語を学習するための入門である。中国語は例外ではない。一般的に中国語を読むためのアルファベットから「中国語の音」を学生に認知させる。それから中国語発音のアクセントを学習に移る。しかしながら、中国語は独特な「四声」あるいは「声調」(アクセントともいう)がその声調変化に伴う抑揚感がある一方、学習者はなかなか入門できないことが教育過程の第一関門である。とくに第三声(V)に関しては学生がほぼ発音できない。一体なぜであろうか、教員が労力・時間を費やししながら効果はあまりなかったことは何であろうかが常に思うことである。

語学発音に関して教育方法は基本的に二通りである。一つは、中国語音韻学のような発音の技法・ノウハウを徹底的に説明したうえ教え、そのうえ、繰り返す練習を通じて発音できるようにする。通常の語学教材は大体4回授業か5回授業を分けて「声調」「母音」「子音」「複母音」という順で授業を行う。最初には「母音」「子音」のそれぞれアルファベットの発音が大体上手く行って、「複母音」「鼻母音」となると一つ山場になる。「g」の「ng」の発音方法は

一つ難関である。さらに「子音」を「母音」と組み合わせしたら一つ漢字の音節になるから、学習者が完全に混乱してしまう場合はしばしばある。例えば「拼音」に声調と付けたらほぼ発音できない。そして第1声から発音し直して学生が発音できるようになった。たとえばba, paのような発音すら区別できないこともあった。鼻母音もそうである。鼻の裏に気道があり、それを利用して呼吸を調整することで中国語発音の要領のひとつでもある。学生がなかなか上手くいかず、実際、発音授業はまず呼吸法を学習することが先に行うことで対応した。呼吸を調整する練習の例として無気音と有気音の発音を先に学習する。無気音の発音特徴としては息を飲み込みながら発音するに対して有気音は息を吹き出しながら発音する。このような教育実践が時には効果的であった。しかしなぜ音声が変わってくるのか、呼吸量の調整である。つまり呼吸の量を如何にコントロールするのが鍵となる。

子音発音全体は短めにする。しかしあまりにも短く過ぎると、声や発声が出来なくなる恐れがある。それらの「時間調整」は大変重要である。なぜであろうか、時間調整とは何であろうか、学生が戸惑い困惑した様子がかかなりあった。要するにこのような「母音」と「子音」を組み合わせ出来なければ、中国語の漢字を読めなくなり、正しく中国語会話は大変難しくなる。そうすると、「読み」「書き」ではなく、「書き」のみを習得となる。なお、「読む」の基礎である「聴く」能力アップするため、映画やビデオなど様々なメディア授業を試み、ネイティブスピーカーを活かして学習者に聞かせたりすることもあった、効果的とはいえない。原因は恐らく発音にあるかもしれない。

もう一つ発音の教育方法はネイティブスピーカー特性を活かして学生が生中国語を「聞く」と、その場合で中国語を「真似」することである。中国語の音韻学のような細かいところ、あるいは発音技能・技法を断らず、生の発音を学生に聞かせたり真似したりすることで学生が自ら発音を挑戦してもらおう。練習する次第に発音できるようになった。とくに母音や子音の第1声は「真似」したら第2, 3, 4音ができるようになる。不思議ではある。考えてみたら「真似」するのが語学的に入門早いかもしれない。理屈っぽいようなことを理解しなくても済むわけであるから、新しい音に出会ってその新鮮感や刺激があるからごく自然的な出来事かもしれない。そのようなシンプルな教え方が何年も実践してみた。しかしこのような方法で習得した母音や子音の音声をどのくらい期間覚えられるか、そして「子音」と組み合わせたら応用できるかも問題となっている。時間を経つと大体記憶が残っていない。結果として復習や最初からもう一回「真似」するくらいを繰り返すことになる。

## 2. 文法教育と中国語の慣用表現

文法教育実践について、語学のシラバスでは大体このように書く。つまり「基本的な文法を理解して常用文型を応用できる、日常会話ができるようにする。」である。到達目標として文法や会話を重点に置く。文法授業はさほど難しくない。英語語法の基礎があれば中国語文法はすぐ入門でできると言われている。要するに文法を覚えるよりも学生は「文型」による文法学習はすでに慣れているからである。教育時間や復習確認はそれほど問題がなかった。しかし中国語文法に従っていくつか例文を作ってもらおうと、主語を抜いたり動詞の属性を混乱したりするので、日常生活の感覚で動詞を使ってしまうケースはよくあった。なぜであろうか、例文を真似するのは語学上では一般的である、例文のように名詞を置き換えて問題はほぼなかったに対して人称代名詞や動詞になると数や属性が一致しないミスがよくあった。勿論単に名詞を羅列してもコミュニケーション上では通じるほど通じる。しかしながら書いてしまうと、「所有関係」「所属関係」を明確にしないと句として成立しない。

そもそもなぜ中国語文法を学習するかが問題ではなく、文を作る際に何から着手するかが重要である。授業する際に学生の作業を観察すると「文型」からではなく、知っている単語を羅列してから文を構築する場合はよくあった。句を作る際に中国語の発想としてはまず主語が如何に確立していくのが普通である。確かに中国語では動詞が数や時態とは関係が薄いかもしれない。英語のように主語と動詞には単数や複数関係が制限されている。それならば文型を固めてから完全に文型の通りに文の作成作業を実践するのが効果的ではないかと思われる。結果としては文が正しい文法となるが、中国語らしくない文になってしまう。その原因は母国語から影響か辞書から調べたままに使ったかがよく分からない。文法上は正しいものであっても、「動詞」は正しくない。恐らく動詞の語彙そのものは理解していないかもしれない。動詞の語彙を理解するよりも学習者が単に動詞を覚えてだけである。動詞を確認する際に、なるべく動詞の語彙通り例文を取り上げると教育実践してみた。効果はあまりなかった。恐らく母国語の発想で外国語を理解しようとする、たまたま間違いがあるからである。

もう一つは「文法」授業では「慣用表現」を如何に教育するかが問題である。時間表現や所有表現のような文法がはっきりした場合ある一方、「慣用表現」は語法上根拠が乏しい。「慣用表現」を教える際にいつもどうやって学習者が理解してくれることを悩んでいた。「慣用表現」は中国人が習慣的に用法であり、時々文法的な解釈がつかない場合しばしばある。それでは、そのような「慣用表現」はどのような場面で使うか、その言語環境を認識してもらうため大変時間がかかる。教育効果は薄く苦勞している。実践した方法はまず様々な「慣用表現」が生まれた言語環境を再現する。「生」の言語環境を再現できるならば実感できるが、しかし会話環境を生まれるのはそれほど簡単ではない。時にはビデオやオンラインなど素材を使用した場合

ある。とくに言語背景を説明するため異文化理解の難しさを感じられた。

中国語の文型を教えるのがさほど難しくない。S+V,S+V+Oのような文型は基本的に英語語順と同様であるから学習者が理解しやすい面もある。単語さえできればごく簡単な中国語の語句が作成できる。しかし主語や述語も目的語をどうやって選ぶか、学生が戸惑い場合はしばしばあった。つまり母国語からの影響とはいえ、名詞や動詞の属性を無視にて間違いはよくあった。例として「工作」は仕事をする意味ではなく「工作員」のような意味を理解している。つまり単語の語彙を理解していないかもしれない。結果的に単語を使えない状態になる。実際には多くの学習者は中国語単語の語彙を分からないまま、文の作成作業に入ってしまう。そして母国語の発想で中国語単語を選び、中国語の文づくりを行われたわけで中国語らしくない文になってしまった。

文を作成する際にどのように単語を選ぶか、まず単語の語彙を正しく理解すること、その上例文を確認することは重要である。これは長年教育実践で切に感じた中国語教育の重要な課題の一つでもある。このため授業中にやはりなるべく多くの例文を挙げ、語彙の浸透を図っていく。現在、多くの語学教材ではこのような例文は主に対話形式になっている。要するに質問に対する答える形となり、「語彙」を表現できるような例文が極めて稀である。中国語単語の「語彙」は限定的なもので、語学上狭いという特性がある。諸外国語に比べて限定された語彙を応用できるのは至難の業でもある。なぜならば言語環境は単語の語彙を選択したり応用したりする基本で、言語の背景を経験したことない学生にとっては大変難しいであろう。それならば単純に覚える方法もあるが、それは試験のための学習方法であり、教養科目としての語学教育とは馴染まないと考えられる。

そして作文作業は「慣用表現」を教える際に難しさを感じたわけです。「このときに中国人はよくこのように使います」とはよく使うセリフである。問題なのは「このとき」を説明することが難しい。なぜならば、「このとき」を解釈するため教員の教育知識や経験によるからである。しかもよく「このとき」の解釈ではなく、「あのとき」の解釈になってしまう。作文しながら「慣用表現」をなれるという教育実践が行われたが、「慣用表現」を短文に組み入れることで理解や応用の検証として価値ある教育実践だと思われる。

最後に会話授業について考える。大体基本文法や基本単語を学習したら会話授業を取り入れることが多い。会話文の内容は基本的に日常会話や大学生に関わるキャンパスライフなどである。学習者の発音や文法使用、単語語彙など確認作業が一度だけできるのでメリットがある。要するに教育効果を確認するため手段としてよく使用される。まず教材の本文（会話文）を朗読することで、その後置き換え練習をするのが一般的である。しかし学生が自ら会話したり質問したりすることはあまりしない、挨拶会話だけで終わってしまうのはほとんどである。動詞

の動態への配慮はせずほぼすべて一般現在形をもって会話する。過去形の動詞句を使うべきところに気づきはない。しかもこれは未解決課題の一つでもある。